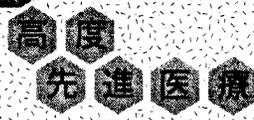


3ユーース

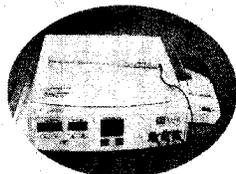


埼玉医科大附属病院
消化器内科・肝臓内科

高度先進医療の「肝がんに対する高周波焼灼(しょうしゃく)療法」は、肝がん病巣に電極針を刺し、ラジオ波を放出して周囲組織を焼灼、壊死させる治療法だ。外科手術による患部切除に比べ、患者への侵襲性は格段に低い。適応疾患は、原発性肝がんと転移性肝がんだ。

埼玉医科大附属病院・消化器内科・肝臓内科は、2001年3月から同治療法を開始した。ただ、保険診療は適応されないため、同治療を受けた場合、医療費は全額患者の自己負担になる。同科の藤原研司教授によると、同病院が高度先進医療を申請したのは、混合診療を可能にし、患者のこうした経済的負担を軽減するためだった。日本肝臓学会も厚生労働省に保険適用の要望書を提出しているが、いまのところ、その見通しは立っていない。

肝がん高周波焼灼療法



ラジオ波で周囲組織を壊死

外科手術とほぼ同等の成績

同技術によって同病院が高度先進医療施設に認定されたことで、「肝がん患者の受診者数が増加している」(医務課)という。01年3月から03年7月までの患者数89人のうち、男性は71人、女性は18人。病院全体のイメージアップにつながっており、同病院は肝がんの高周波焼灼療法を前面に押し出していきたい考え。

治療成績は、外科手術とはほぼ同等で、89例中再発が27例(30.3%)、局所(腫瘍の周辺)再発9例(10.1%)、異所(肝臓の別の場所)再発が16例(18.0%)となっている。死亡は、15例(がん死9例、肝不全死4例、腎不全死1例、不整脈死1例)。

担当医の柿沼徹氏は、外科手術のできなかった患者にも対応でき、エタノール注入療法よりも治療成績は良好で、入院期間も短縮できていると話す。

柿沼氏によると、同技術だけで根治できるのは、腫瘍径3cm以下の腫瘍が3つ以下の場合と、腫瘍径5cm以下の単発の腫瘍だ。それ以上の大きさの場合は、別の治療法が必要になる。

ラジオ波とは、中波といわれる

460kHzほどの電波で、AMラジオの周波数だ。焼灼療法は、電波を放つ針(写真右上)を皮膚の上からがん組織に刺し込み、ねらい打つ方式。原理は、電子レンジによる食物加熱に似ている。電波でがん細胞の分子に振動を与え、分子同士が起こす摩擦熱(100度近く)によりがん組織を凝固させる。凝固したがん組織は、それ以上増殖できず、やがて吸収されてなくなってしまうという。

周波数が高いほど凝固力も強いが、同療法では比較的低い周波数のラジオ波を用いる。従って、振動を与える力は弱い、波長が長く広範囲を焼灼できるのが特徴だ。

◎経験積んだ医師が必要

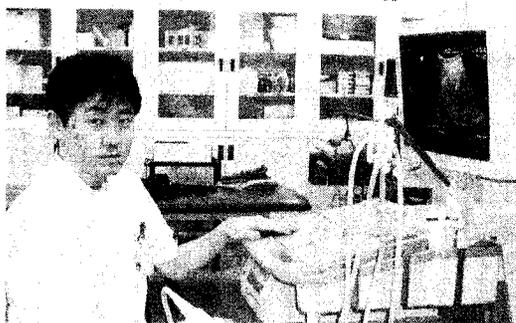
柿沼氏によると、同技術にとって難しいのは、腫瘍の位置と大きさの確認。皮膚の上から超音波で針の穿刺経路を設定するが、腫瘍のある肝臓の場所によって、患部を正確にねらい打つのが難しく、経験を積んだ医師の技術が必要だという。

焼灼時間は5分から15分で、場合により2回行う。出血はほとんどないが、焼灼中に強い痛みを生じることが多いため、鎮痛剤、鎮静剤を併用して疼痛を緩和させる。副作用はあまりないが、治療後、発熱などが起こった患者もいたという。焼灼範囲の確認は、主にCTで行い、がんの残存があれば追加焼灼を行う。

◎患者数が増えても対応可能

同治療法にとっての必須条件は、①血管造影②CTの設備③入院施設の完備④超音波検査の経験が豊富な医師。出血、胆嚢炎、胸膜炎、腸管穿孔、潰瘍などの合併症の可能性があるため、周辺設備も徹底する必要がある。

柿沼氏は、同技術を高く評価しており、保険適用も含めていっそうの普及を望んでいる。治療には、最低3人の医師が必要だが、同病院ではすでに7人の医師が同技術を習得した。今後、需要が増え患者数が増えても対応できる状態が整っているという。



担当医の柿沼徹氏。超音波で腫瘍をみている。



肝がんに対する高周波焼灼療法

3. 米

1968

患者の書き上く医学円の麻留学の術室やられての500港からグハム途中オーリで、「くんだ

公私に一家もにも雪入しまは受けにも買

